日本と中南米をつなぐ日系人

外務省
Ministry of Foreign Affairs

日系人とはどんな人？

中南米には、私たち日本人とルーツをともにし、日本と各国の架け橋になっている「日系人」がいます。

日本からの移住者およびその子孫である方々は、各国で日系団体を設立し、日本文化の継承と普及に大きな役割を果たしてきました。

日本人の海外移住は、1868年のハワイへの集団移住から始まりました。メキシコやブラジル、ペルーなど中南米への移住の歴史は、120年以上も前にさかのぼります（各国の日系人数は３ページをご覧ください）。

日本から各国に渡った方は１世、その子や孫は２世、３世と呼ばれ、近年は６世も誕生しています。これらの方々は、新たなネットワークを築きながら、各界で幅広く活躍しています。

各国で活躍する日系人たち

メキシコ

ホセ・太郎・ソリジャ・武田
建築家
日系２世。建築設計および芸術の分野で活躍。在メキシコ日本国大使館・新文化センター「ESPACIO JAPON」の建築設計などを手掛ける。非営利団体「ソーシャル・ランドスケープ基金」を共同設立。

© Miho Hagino

ペルー

マリノ・モリカワ
科学者
日系３世。日本で研究を重ねたナノテクノロジーの最新技術を用いて各地の河川・湖の浄化作業に尽力。ペルー政府や企業からも高い評価と協力を得ている。環境負荷をかけず自然の力で浄化することに重点を置き、リマ北方の湖などでプロジェクトを進行中。

© MORIKAWA GROUP

ミツハル・ツムラ
シェフ
日系２世。自身の経営する日系フュージョン料理のレストラン「ＭＡＩＤＯ」が、2017年の「世界のベスト・レストラン50」で８位にランクイン。国際的な注目を浴びるトップシェフ。

© José Cáceres

ボリビア

藤井康一
音楽家
日系１世。1989年にJICA青年海外協力隊として「ボリビア国立音楽院」へ派遣された後、1997年に私財を投じて「国立マン・セスペ音楽アカデミー」を再建。同校の校長を務めながら、日本の楽曲を含む音楽教育に尽力している。

ブラジル

エンリケ・タマキ・シゲキ
野球選手
日系３世。ブラジル日系人初の日本プロ野球選手として、「広島東洋カープ」などで活躍。

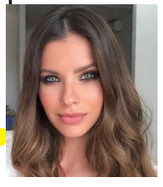
フェルナンダ・タカイ
ミュージシャン
日系３世。ブラジルのポップ・カルチャーを牽引するバンド「バト・フー」のボーカル。

ポリアナ・オキモト
水泳選手
日系４世。2016年リオデジャネイロオリンピックのオープンウォータースイミング女子10キロで銅メダルを獲得。

パラグアイ

松宮3姉妹
実業家
日系２世。パラグアイ金融界などで存在感を示す。長女クリスティーナ（保険会社社長）、次女ビクトリア（養鶏業大手取締役夫人）、三女マリア・エレナ（信用組合代表取締役）。

アルゼンチン



マリア・エウヘニア・スアレス
モデル・女優
日系４世。アルゼンチン国内で活躍。1992年ブエノスアイレス出身。

私、nikkei人です！

Emi Renata エミ レナータ Interview

数々のファッション誌やCM、ラジオ、ファッションショーなど、日本や海外で幅広く活躍するモデルのエミ レナータさんは日系３世。故郷ブラジルのこと、日本のこと、日系人としての暮らしについて、お話を伺いました。

エミ レナータ（Emi Renata）●1986年、ブラジル・サンパウロ生まれ。日系ブラジル人の父、イタリア系ブラジル人の母を持つ。14歳のときにサンパウロ市内でスカウトされ、モデルの仕事をスタート。2004年から日本を拠点に雑誌やショーなどで活躍。現在は雑誌CLASSYのレギュラーモデルや、イタリアブランド「CALZEDONIA」のアジアアンバサダーとしても活躍中。

子どもの頃の思い出は、祖母手作りの日本料理

初めて来日したのは2003年。実はそれまで、日本のことについて詳しくは知りませんでした。日本人に抱いていたイメージといえば、まじめで親切、保守的、伝統を守っている……といったことぐらい。私が暮らしていたサンパウロでは、クラスメイトに日系人がいたこともありましたが、それほど深く関わる機会がなかったのです。父の故郷には日系人がたくさんいて、そこでは接点がありました。毎年、夏休みに遊びに行くと、祖母がおいしい日本食を作ってくれるんです。私にとってはこの味が、日本とのつながりを感じさせるものでした。

自分自身の日本的な部分を意識するようになったのは、来日してからのこと。日本人の話し方やしぐさ、食生活、振る舞いが、私の家族とよく似ているなあと気づいたんです。だから、カルチャーショックは感じることはありませんでした。むしろ自分の家にいるような親しみを覚えていたほど。一方で、日本での暮らしが長くなった今でも、自分はやっぱりブラジル人なんだなと思うことがあります。たとえば、人との関わり方。もちろん、私にもシャイな部分はありますが、日本人と比べればかなりオープンです。不思議な感覚なのですが、今の私は、心はブラジル人で、頭は日本人という感じです（笑）。

異なる国民性が融合すれば もっと素敵な社会になる

日本で暮らしている日系人のなかには、習慣や文化の違いから疎外感を感じている方もいるかもしれません。でも、100％日本人ではない、100％ブラジル人でもない私たちのような立場は、逆に「どちらも選べる」というメリットもあると思うんです。また、日本に暮らしていると、みんなと同じでなければならない、同じように振る舞わなければならないと考えがちですが、私たちは混血であるという時点で、すでに周囲とは違います。その違いをありのまま受け入れて、夢を追いかけたほうが、人生は素敵ですよね。

これから日本をめざす日系人の方々に一つアドバイスするとすれば、真摯に努力してほしいということ。ブラジルのように「明日やればいい」といった考え方は、日本の社会ではなかなか通用しません。そのことを心がければ、日本は暮らしやすいし、成長するチャンスはたくさんあると思います。同時に、正直で、やるべきことをしっかり行なう日本の国民性も、すごく気に入ると思います。

日本人の皆さんにも、日本にいる私たち中南米出身の日系人ともっと交流を深めてほしいと思います。わざわざ外国まで行かなくても、国内で異文化を体感できるなんて、とても素晴らしいこと！　もっともっと冒険して、異なる文化を楽しんでほしいですね。

中南米の日系人と、日本に暮らす日本人。育った環境も習慣も異なるからこそ、交わって素晴らしいものができるはず。たとえば、日々の生活の中に幸せを見出して人生を楽しめるブラジルと、他人を尊重でき協力的で良識がある日本、双方の国民性が融合すれば、よりバランスのとれた社会になると思うんです。私自身も、日本社会に、ちょっと違うエッセンスを与えられる存在でありたいなあと思っています。

世界と中南米の日系人

世界全体の日系人数は360万人以上。このうち、約６割に相当する約213万人もの人が中南米に暮らしています。

ブラジル日系社会のシンボル「リベルダージ」

サンパウロの中心部に隣接するリベルダージ地区は、世界最大規模の日系人の街。赤い鳥居をくぐると、提灯を模した街灯が並ぶ風景に迎えられます。地区内には、寺院や日本庭園、日本食レストランが点在し、まるで日本の都市のよう。中国系や韓国系の移民も多く、東洋人街とも呼ばれています。

世界の推定日系人数
（平成 27 年 10 月 1 日現在）

ブラジル	約 190 万人
米国	約 133 万人
ペルー	約 10 万人
カナダ	約 88,000 人
アルゼンチン	約 65,000 人
オーストラリア	約 57,000 人
メキシコ	約 20,000 人
ボリビア	約 14,000 人
パラグアイ	約 10,000 人

中南米のその他地域の推定日系人数

チリ	約 3,000 人
コロンビア	約 2,000 人
キューバ	約 1,200 人
ベネズエラ	約 820 人
ドミニカ共和国	約 800 人
ウルグアイ	約 460 人
中南米全体	約 213 万人

日系人の少ない国でもキラリと光る存在感

ひとくちに中南米日系社会といってもさまざま。規模の大小にかかわらず、日系人は各国で信頼され、存在感を発揮しています。

キューバ

河野治彦（1世）
バーカッショニスト

ニカラグア

八巻晴夫（1世）
日本ニカラグア東洋医学大学学長（創立者）

ドミニカ共和国

遠藤明（あかり）（2世）
映画・ミュージカル女優

困難を乗り越えて活躍した中南米の日系人

移住の歴史と経済社会開発への貢献

Interview

今でこそ飛行機で簡単に行ける中南米。しかし、かつては船で何日もかけて行かなければならない遠い場所でした。そんな地球の反対側にある異国へ、人生を賭けて出発した移住者たち。苦難の歴史を乗り越え、今の日系社会の礎を築いた彼らの活躍を、JICA職員の武田浩幸さんにお聞きしました。

「移住」はとてつもなく大きな人生の選択

日本から中南米への移住は、1880年代から1960年代にかけてさかんに行なわれましたが、ひとくちに移住といっても、その歩みは時代（戦前か戦後か）や国、地域によって大きく異なります。とくに戦後、JICAはその前身の時代から、さまざまな移住政策に携わってきました。

1908年、781人の日本人家族が、コーヒー農園で働く契約移民として「笠戸丸」に乗りブラジルへ向けて出発したことは、ご存知の方も多いと思います。彼らは、数年間は働き、貯金した後に帰国することを夢見ていましたが、実生活は予想だにしない過酷な状況でした。当時のブラジル移民受け入れは、同国の奴隷廃止による労働力不足を補うものだったとも言われるほどです。しかし、それにも屈せず、多くの人が自作農となる道を選び、資金を出し合って集団入植地や農業組合を形成していきました。それらはその後、ブラジルの農業界で大きな役割を果たす組織にまで成長しています。

未開の土地では原始林や風土病に悪戦苦闘した地域もありましたが、移住者はそれを乗り越え、各地で農業発展に大きく貢献しました。たとえば、パラグアイでは国の主な産業である大豆栽培をリードし、ボリビアでは米や大豆、小麦、柑橘類栽培などの発展を支えています。また、それまで野菜を食べなかった地域で野菜栽培を定着させ、現地の食生活改善に貢献したケースも少なくありません。

アルゼンチンは、沖縄県系人の方が多く、他の南米諸国から転住してきた人も多数います。その多くは、花卉栽培やクリーニング業に従事しました。彼らが基礎を築いた花卉栽培は今日、アルゼンチンの産業のひとつであり、日系人の貢献はよく知られています。

ドミニカ共和国には、移住事業により1956年から1319人が入植しましたが、入植先に関する事前調査や情報提供が適切に行われなかったなどの事情により、生活の立ち上げにあたって多大な困難に直面しました。今も、移住者との対話を通じて、課題解決に向けた対策がされています。

こうした移住者の方々の困難は当事者ではない私たちには計り知れません。だからこそ、その歴史や移住の尊さを語り継ぐことが、大切なのだと思います。

中南米で信頼を築き上げた日本人

外国で信用を築くことは、けっして容易なことではありません。しかし、中南米各国に移住した日本人たちは、異国で大変な苦労を重ねながらも、大きな信頼を得てきました。たとえば、ブラジルでは「Japonês Garantido（日本人は信頼できる）」と言われるほどです。高度経済成長期に日本企業がブラジルに進出した際には、その仲介役として日系人が重要な役割を務めました。日系人への好意的な評価が、日本企業のブラジル市場への進出を容易にしたともいえるでしょう。

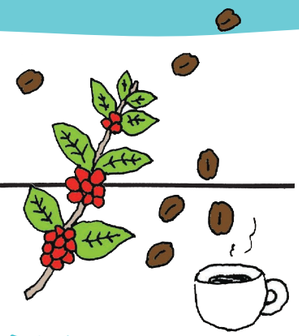
欧州系移民が多いアルゼンチンにおいても、「日系人は正直で勤勉」という印象が浸透しています。移住者たちが営んでいたクリーニング業が、納期厳守でお客本位の誠実な接客であったことも、その背景にあることは間違いありません。パラグアイでは、困難に立ち向かい原生林を切り拓く姿と実績が、日系人に対する大きな信用となりました。

こうして先人のたゆまぬ努力によって築かれた日系社会は、はるか彼方で、日本のことを強く思ってくれています。今後、次世代の人材を含めて彼らとの絆を強化し、パートナーとして連携していくことは、日本の大きな国益につながるに違いありません。そのためにも、より多くの人に、移住の歴史や日系社会のことを知ってもらいたいと願っています。

武田浩幸●JICA職員として16年にわたり、ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンなどに勤務。学生時代はブラジル・パラー州ベレンに１年間、研修留学。日本語を話さない日系人家庭にホームステイし、現地の多くの日系人と関わる。

世代別日系人からのメッセージ

私にとって「日系人」とは



かつて中南米に移住した人々が大変な苦労を経て現地で生活の礎を築き健闘したエピソードは、今も各国で大切に語り継がれています。そんな１世の背中を見て育った２世、そして３世、４世。

彼らにとって、「日系人」であることは、どんな意味を持つのでしょうか？

1世 in パラグアイ

ナオユキ・トヨトシ
（前駐日パラグアイ共和国大使）

日系社会と現地社会とのつながりが大切

日本の大学を卒業して私が最初に渡ったのはアルゼンチンですが、その後、そこで知り合った日本企業の方とご縁があり、日本製バイクを販売するため、パラグアイへと移りました。ほかの日本人移住者とはパラグアイへの入り方が違うこともあり、少し立場は異なるかもしれません。

当初から、私は生活の向上を目指し、現地の友人をつくるように心がけていました。移住から数年経って日本に一時帰国した際、「ここは日本人が多いなあ」と驚いてしまったのですが、それほどパラグアイになじんでいたのだと思います。

自分自身のことを日系人という視点で考えたことはありませんが、パラグアイ日本人移住50周年（1986年）を機に日系社会と関わりをもつようになり、とくに1世の方々との協力を深めたことで、日系人としての義務を果たせたのではないかと感じています。

これからは、日系社会がパラグアイ社会に開かれていくこと、そしてパラグアイ社会とのつながりを深めていくことが重要だと感じています。

2世 in ボリビア

秦カルメン
（元ボリビア教育省次官）

日本とボリビア、2つの文化は私の誇り

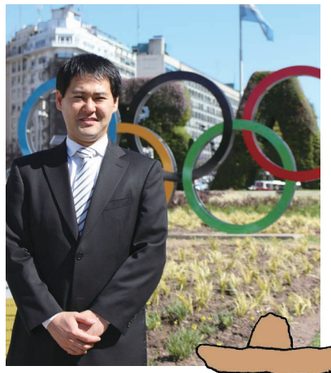
父は広島県、母は佐賀県の出身です。だから、日本は私と私の家族のルーツ。私にとって、日系2世であるということは、二つの文化の融合を意味します。日本とボリビア双方を知っているのが私の特徴であり、両国の架け橋になることは、私の人生に課せられた大きな挑戦かもしれません。

同時に、私は本当に恵まれた人間だと思います。なぜなら、二つの国の文化に大きな誇りを持ち、双方の良い面を日々の生活に取り入れ、さらに、その経験を新しい世代へ伝えていくことできるからです。

日本は数千年の伝統を守りながらも、最新のテクノロジーも併せ持ったすばらしい国。そして、生命、規律、秩序の尊重という重要な価値観を、いつも私に教えてくれる国でもあります。これらは、個人や社会、国が発展するためにとても大切なこと。そんな日本の伝統や習慣を、これからも学び続けていかなければと思っています。

3世 in アルゼンチン

ガストン・ニコラス・アラカキ
（ブエノスアイレス工科大学研究センター副所長）

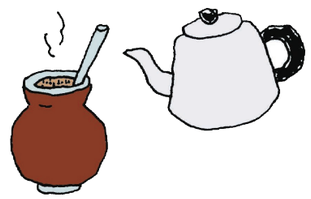


日系人仲間は私の家族のようなもの

1938年、祖父母が日本からアルゼンチンへと渡り、私たち家族のアルゼンチンでの歴史が始まりました。「日本とは」と問いかけられれば、「祖父母が生まれ、育った場所。すなわち、私の原点です」と答えています。私は、日本の文化や豊かな歴史、そして、成長する隣国とも積極的に協力していく姿勢を、とても尊敬しています。

そうしたバックグラウンドを持ちながら、アルゼンチンという全く異なる価値観の国で暮らしている私は、視点も多様で、二つのアイデンティティを持っています。同時に、日系人の仲間は、私にとって家族のようなもの。アルゼンチンに生まれ育った私は、ほかの日系人とさまざまな思いを共有してきました。

日系人の私たちができるのは、両国の文化や習慣の違いを乗り越え、友情と協力を生み出すこと。これを実現するために、さらに貢献していきたいと思っています。



4世 in メキシコ

オノデラ モンターニョ・シズエ・シルビア
（建築家）

日本とメキシコの架け橋になりたい

私は日系４世です。父のルーツは宮城県で、母はメキシコ人。私はメキシコで生まれ育ちましたが、「変わった名前」や、現地の人と異なる容姿や習慣を持っています。

日本という国は、つねに私のアイデンティティの一部をなしています。そして、心の中で、「自分が日本に所属しているんだ」という強い絆も感じています。

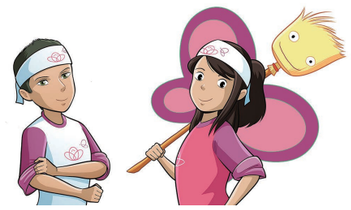
私にとって、日系人であるということは、三つの意味があります。一つは、二つの国の伝統や言語、考え方などをしっかりと感じられるということ。二つめは、双方の文化を合わせてさらによい物を作り出せるということ。三つめは、それを有効活用できるということ。日本とメキシコ、この二つのルーツを、いつも誇りに感じています。おかげで、素晴らしい経験をしたり、かけがえのない友情を育むことができるから。日系コミュニティに所属していることに、とても感謝しています。日本とメキシコの架け橋にならなければと、大きな責任も感じています。

変わりゆく日系社会　各地で活動する　日系社会の今

これまで、中南米各国で日系人によるたくさんのイベントが行なわれてきました。近年見られるのが、日系人ではない人たちの参加。日系人を家族に持つ人だけでなく、周辺の住民が参加するケースも増えています。また、ＳＮＳを利用した新しいネットワークも登場。日系社会は着実に広がっています。

新世代グループの活動

RevitaLibaで地区活性！



「RevitaLiba」のキャラクターの存在もイベントを盛り上げた（提供元：JCI Brasil-Japão）

サンパウロの中心部に隣接する世界最大規模の日系人の街「リベルダージ地区」で、2017年10月に地区を清掃する大イベント、「リベルダージ地区活性化活動（RevitaLiba）」が開催されました。

このプロジェクトの目的は、大掃除を通じて日系諸団体や同地区に通う人々との連携強化を図ること、そして、先代の日系社会が残してくれたレガシー（伝統）を継承すること。日本ブラジル青年会議所（JCI）を中心に発足した実行委員により実施されました。

週末に行われたイベントは早朝のスタートにもかかわらず、日系を含む地区住民や日本企業駐在員など約300名が参加。約２時間かけて、メイン通りのガルボン・ブエノ通りを中心に約３キロにわたる道路を掃き上げ、歩車道境界ブロックのペンキ塗りを行いました。

公共の区域で道路を封鎖しての清掃事業という前例のない一大プロジェクトでしたが、一般の人々や地域コミュニティ、民間企業、第三セクターの団体や協会の支援もあって、結果は大成功。日本企業からも高い関心が寄せられ、スポンサーとなったり、駐在員が家族同伴で参加したりするケースも多く見られました。

また、地元のメディアでも大きく取り上げられています。

「日本のよき習慣である大掃除を、日系社会の起点であるリベルダージ地区で始められて嬉しい。若い世代のポテンシャルを信じてくれたサンパウロ総領事館にも感謝しています」とナカノ・マルシアＪＣＩ会長（日系２世）。このイベントを機に、この地区での若い日系人たちの活動にますます期待が寄せられています。

配布されたお揃いのハチマキとTシャツを着た参加者たち（写真提供元：Gregory Grigoragi）

「日本文化とアイデンティティの継承」というコンセプトのもと、大掃除を実施

（写真提供元：Marcelo Asamura e William Hsu）

日本祭りが中南米でブームに?!

世界最大規模の日本祭り

来場者の注目を集める「ミス・ニッケイ」（写真提供元：ブラジル日本都道府県県人会連合会）

ブラジルをはじめ中南米各国で人気を博しているのが、日本祭りや日本文化を紹介するイベント。週末の開催で数万人単位の参加者を集めるほどの日本祭りが数多く存在しています。

各地の日系団体が主体となって行なわれていますが、なかでも、サンパウロを中心に活動を行うブラジル日本都道府県人会連合会（県連）が主催する「日本祭り（Festival do Japão）」は、毎回約20万人の参加者を集める、世界で最大規模の日本祭りです。

2017年までに20回開催されているこの祭りの内容は、和太鼓や日本舞踊など日本芸能のパフォーマンスから、近年日本でも流行しているよさこいソーラン祭り、柔道、剣道、空手など武道のデモンストレーション、生け花の展示、折り紙ワークショップ、コスプレ大会、ラジオ体操など、バラエティ豊か。また、各都道府県の郷土料理が食べられる飲食店や、日系農家が生産する野菜や果物、日用雑貨を販売する店から日系企業ブースまで、さまざまな屋台が出て賑わいます。

毎回、来場者の注目を集めているのが、日系人女性のコンテスト「ミス・ニッケイ（日系人女性のミスコン）。スタイル抜群の日系人の女性が舞台を闊歩する姿は、ブラジルらしい明るさにあふれています。

この「日本祭り（Festival do Japão）」の大成功に触発されるかのように、各地の日系団体も、既存のお祭りのスケール拡大や新規お祭りの立ち上げに挑戦。ブラジル人の家族連れが楽しそうに焼きそばや天ぷらを食べる風景も各地で見られるようになりました。こうしたイベントは、日本文化の普及において、大きな役割を担っています。

若い日系人の活動が話題に

「Liter of Light（１リットルで明かりを）」は、ゴミとなるはずのペットボトルを再利用してライトを作り、必要な人に届けるプロジェクト。15都市で350人あまりのボランティアが活動しています。ブラジル代表を務めるのが、日系３世のライース・ヒガシさん。彼女は、2015年にNGO団体「Litro de Luz」をサンパウロでスタートさせました。

「日本からブラジルに渡った祖父は、孤児院でボランティアをしていました。そうした社会活動家としてのルーツが、今の私を作っているのだと思います。日本人が持つ忍耐や勇気は、数え切れないほどの困難に立ち向かう助けに、多様性の尊重と協調性は、メンバーやコミュニティとの関係作りに、そして誠実さは、利害関係者からの信頼を得ることにつながっています」とライースさん。「一本のペットボトルと太陽光エネルギーだけで、子どもたちが夜も本を読むことができるように、女性が安全に夜道を歩けるように、そして、お年寄りが集うことができるように」という熱い思いで、現在も果敢に活動を続けています。

日系人も、そうじゃない人も、ともに学び働く

現地で信頼を得る日系の学び舎、地域に貢献する日系病院

ブエノスアイレス日亜学院
アルゼンチン

同校はブエノスアイレス市教育省の正式な認可を受け、日本語教育をカリキュラムに取り入れたトリリンガル（日・英・西）校。日本とアルゼンチン両国の教育法や価値観を取り入れ、アルゼンチンの発展に貢献できる人材を育成しています。日本文化紹介や日本ツアーを企画するなどの功績が認められ、創立90周年の2017年に、日本の外務大臣表彰を受賞しました。

日系人も非日系人も同じクラスでともに勉強

卒業生より

トマス・サンティアゴ・スカネタさん
（2009年卒業）

幼少から大人になるまで学んだ日亜学院は、私の第二の家。素晴らしい教育だけでなく、いつも私を助けてくれる友だちができた、かけがえのない場所でもあります。現在、麻酔学を専門とする医師として働く私を育ててくれたのは、日亜学院での日々。規律や尊敬の心、成功への誇りや目的達成のために努力する日本ならではの精神は、心の支えとなっています。

日本メキシコ学院
メキシコ

全校生徒が参加して行なわれた運動会の様子

1977年、メキシコシティに開校。日本の文科省カリキュラムに準拠した日本コース（小学部と中学部）と、メキシコのカリキュラムを学ぶメキシココース（幼稚部～高校部）とがあります。日本コース在校生は140名、メキシココース在校生は1049名、計1189名（2017年5月1日現在）がここで学んでいます。日墨両国友好のシンボル的存在である同校は、これまでにも皇族や日本政府要人が多数訪問。近年では2014年7月に安倍総理大臣のメキシコ訪問に同行した安倍総理夫人が、同年10月には秋篠宮同妃両殿下が訪問されました。また、同学院は2017年に外務大臣表彰を受賞しています。

卒業生より

アレハンドロ・バザーニェスさん
（1992年卒業）

これまで、在日メキシコ大使館（一等書記官兼文化担当官）や国連などで、さまざまな仕事をしてきました。つねに心にあるのは、日本メキシコ学院の「人生の目的はたんに経済的安定を求めるものではなく、自分の美徳を高めることである」という教え。非日系である私がこの学校で学んだことや、卒業後に留学した日本での経験は、私の人生に特別な視点を与えてくれています。

日秘総合診療所／日本人ペルー移住100周年記念病院 ペルー

リマには、ペルー日系人協会が運営する診療所と病院があります。1981年開設の「日秘総合診療所」は、現地の人たちの信頼も厚い医療施設で、日々2500人以上の人が利用しています。2005年開設の「日本人ペルー移住100周年記念病院」は、最先端の医療設備・機器を備え、効率的で心のこもった質の高い医療サービスを提供する非営利機関。年間25万人以上の人が利用し、ペルー社会の発展と福祉に大きく寄与しています。

日秘総合診療所

日本人ペルー移住100周年記念病院

スタッフより

ペドロ・サモラ・ゴンサレスさん
日本人ペルー移住100周年記念病院医師

私の妻とその両親は日系人です。当病院での勤務経験を通じて、私自身も日系社会の一員となり、生活と仕事の両面で、日系人が持つ価値観をさらに学ぶことができました。その価値観とは、職業倫理、効率性、時間厳守、教育、礼儀、そして素直であること、人を助けることの喜び、人へ温かく接することなど、数え切れないほど。この価値観が、私を人として成長させているのだと、日々実感しています。

スタッフより

ノエリア・チリン・ロハスさん
日本人ペルー移住100周年記念病院看護師

日系機関に勤務して学んだのは、隣人を思う気持ちや、人の平等性、協力の大切さ、そして困難に直面しても諦めない忍耐力。おかげで、自分の職業に価値を見出すことができています。当院はペルー社会にとっても大きな存在。医療サービスや健康キャンペーンを通じた社会貢献だけでなく、二つの異なる文化の融合や交流という場も与えています。

日系人が中南米で広めた ニッポン

中南米の各地で見られる、日系人が広めた日本文化。
現地の文化と融合して、ユニークな形となって、
人々の間で親しまれています。

J-POPと盆踊りがミックスした「祭りダンス」でイベントは大盛況！© Giuliano Glaucia Expo Japão 2017 oficial

J-POPに和太鼓で盛り上がる「祭りダンス」

「祭りダンス」は、J-POPをベースに和太鼓の音に合わせて踊るダンスのこと。2001年、南部にあるパラナ州マリンガ市の日系青年会が、当時この街で流行していたチェッカーズの「ギザギザハートの子守唄」をBGMにして踊った盆踊りがルーツだと言われています。盆踊りを若者に受け入れられやすくするための仕掛けは、大胆ながらも大当たり。当時は、「Bon-odori dos Jovens（若者の盆踊り）」や「Bon-odori Moderno（現代盆踊り）」という名称で親しまれていました。

2003年、同州ロンドリーナ市にある若手日系人団体の「Grupo Sansey（グループ3世）」が、主催する日本祭りでこの独特のダンスを「祭りダンス」と命名し披露。その後、ブラジル各地でワークショップを行い、広めていきました。

現在は、ブラジル各地で大人気のこのダンス。レパートリーも約40曲あり、日本祭りでは欠かすことのできないものとなっています。

世界のグルメシーンで注目を浴びる「コミーダ・ニッケイ」

日系２世のシェフ、ミツハル・ツムラ氏による料理。❶シーフードとポテトのクリーム、キヌアを小籠包風に仕上げた「DIM SUM」。❷豆腐を使ったチーズケーキ「ARRECIFE」
©José Cáceres

ペルー料理と日本料理を組み合わせたものが「Comida Nikkei（コミーダ・ニッケイ）」と呼ばれる日系フュージョン料理。かつて日本人移住者の人たちが故郷を懐かしみながら現地の食材で作っていた和食は時代とともに磨きがかけられ、今や「世界のベストレストラン」のなかにコミーダ・ニッケイのレストランが入るまでになっています。

特徴は、ペルーと日本、双方の定番調味料や伝統的な調理法を絶妙なバランスで取り入れていること。日本の醤油や酒が、ペルーの食材とうまく調和しているのです。

ブームをリードするのは、若き日系人のシェフたち。自由な感性によって生み出される、美しく、おいしく、そして斬新な料理は、たんなる流行にとどまらず、ペルーを代表する料理の一つとして確固たる地位を築いています。

その他にもある日本文化

沖縄そば市場

印象的なモニュメントに迎えられるのは、ブラジルのカンポ・グランデにある中央市場。ここでは沖縄そばを食べることができ、毎年８月に「沖縄そば祭り」も開催されています。（写真提供元：Feira Central de Campo Grande）

UNDOKAI

各国で日系団体が中心となって「UNDOKAI」が開催されています。日系人ではない方も多く参加されます。（写真提供元：イタペセリカ文化体育協会）

日本と日系社会 心と心のエピソード

日本から遠く離れた中南米で、そして日本であった、知られざるエピソード――。日系社会と日本との絆があってこそ実現したストーリーをご紹介しましょう。

メキシコで国際緊急援助隊を支えた日墨協会

2017年9月19日（現地時間）にメキシコ中部で発生したマグニチュード7.1の大地震。このとき、日本から援助に向かった総勢72名の国際緊急援助隊を陰で支えたのは、日墨協会（メキシコ所在の日系人協会）でした。

メキシコシティの建物倒壊現場で救助・捜索活動をする国際緊急援助隊に、日墨会館を本部・宿舎として使用することを、日墨協会が快諾。隊員たちは6泊7日間、日墨会館に滞在しました。日墨協会は、雨の中での活動を果敢に続ける隊員たちに、連日、日本式の弁当や温かい味噌汁を提供。隊員たちからは、「被災現場でありながら、屋根があり、水道が出て、トイレもある場所で眠れることは、活動の大きな励みになる」という声があがりました。

また、倒壊現場での救助活動を助ける通訳として、日本語とスペイン語が堪能な若い日系人ボランティアが活躍。隊員たちに同行し、昼夜交代で協力し続けました。

日墨会館から出動する国際緊急援助隊

救助隊から日墨会館へ感謝の印として寄贈された隊員服

被災地へ向かった一人の日系2世

2011年3月13日朝、東日本大震災の被害で混乱する東北に向かうバスとトラックがありました。指揮をとっていたのは、埼玉県で人材派遣業を営む、ブラジル出身日系2世の斎藤俊男さん。被災地の様子を映し出すニュースに突き動かされるように、食料や毛布をトラックに積みこみ現地へ向かっていたのです。斎藤さんはこの日から何度も、地元埼玉の人たちから提供された物資を被災地へと届け続けました。

こうして早くから救出活動に奮闘していた斎藤さんにブラジル総領事館が依頼したのが、「被災地の日系ブラジル人救出」という重要な任務。被災地に暮らす日系ブラジル人は1万3000人以上にのぼり、その多くは長年、貴重な労働力として水産加工業を支えてきた人たちです。日系ブラジル人の妻子を託した日本人男性、他県に暮らす娘のもとへ避難した日系1世の夫婦……、混乱のなか、斎藤さんは多くの人を救いました。

「裕福な日本が震災で困っていることが悔しかった。こんなときこそ、自分ができることがあると思ったんです」と、斉藤さんは当時を振り返ります。

地元、埼玉から集めた支援物資を運ぶ斎藤さんのバス

斎藤さんが来日したのは1990年。ブラジルでは体育教師をしていましたが、日本では懸命に工場で働き、来日から5年目、アパートの一間で念願の起業を果たしました。それから20年。現在、農業関係の会社を経営するほか、埼玉でブラジル人学校（ブラジル教育省から正規課程の教育機関として認定）を運営し多忙を極めながらも、地元でさまざまなボランティアに参加しています。

「そばにはいつも、家族と、私を支えてくれる日本人がいました。この国が教えてくれたのは、人を守る温もり。自分を温かく受け入れ育ててくれた日本には、なにかせずにはいられないのです」と斎藤さん。在日日系社会のリーダーとして、その活躍は続いています。

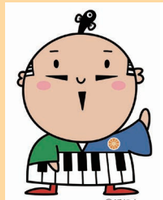
オール浜松で取り組む多文化共生先進都市

浜松市長 **鈴木康友**

日本で最大の日系人コミュニティが築かれているのが、静岡県浜松市。行政サービスの多言語化や日本語学習機会の提供など、25年以上にもわたる市の取り組みが成功し、共生社会を築いています。その取り組みについて、鈴木康友浜松市長からメッセージをいただきました。

「出入国管理及び難民認定法」の1990年6月改正施行による、「定住者」という就労制限のない在留資格創設を契機に、当市には多くの南米日系人が居住することとなりました。居住者の数は、2008年秋のリーマンショックや、2011年3月の東日本大震災の影響により減少したものの、最近は再び増加傾向を示しており、ブラジル国籍の居住者数は全国の基礎自治体で最多となっています。彼らの多くは、製造業に携わる労働者として当市の産業を下支えしてきました。

当市では、外国人市民を地域社会の一員として捉え、この四半世紀にわたり共生に関わる施策に積極的に取り組んでまいりました。今ではその取り組みに評価をいただくことが多くありますが、共生社会づくりは行政だけでできるものではなく、永年にわたる地域の営みと、さまざまな人々の共生への理解と挑戦など、“オール浜松”による取り組みがあっての成果にほかなりません。


©浜松市
浜松市のマスコット「出世大名家康くん」

地域のなかでは、外国人市民の第2世代が活躍する段階を迎えています。大学生を中心とした外国にルーツのある若者グループは、市内の定時制高等学校などに出向き、自身のライフヒストリーを語り、後輩たちが日本での生活や将来について考える場を提供したり、就職支援に関するセミナーを開催したりしています。

学校教育の現場では、2017年5月1日現在、公立小中学校に在籍する外国人の子どもたちの6割が日本生まれであり、うち7割は南米系の子どもたちです。市内の南米系外国人学校では、500人を超える子どもたちが勉学に励んでいます。成長したこの子どもたちの多くが地域で活躍することになるでしょう。

当市では現在、多文化共生施策の指針となる「第2次浜松市多文化共生都市ビジョン」の策定を進めています。日系人をはじめとする外国人材が地域社会でより活躍できる環境づくりをテーマに据え、多文化共生先進都市として、オール浜松で走り続けます。

ポルトガル語で日本文化を発信する日系3世の人気ユーチューバー

今、ブラジル在住ブラジル人や日系ブラジル人の間で話題となっているのが、YouTubeチャンネルの「Japão Nosso De Cada Dia」。バラエティ番組さながらにテンポよく日本の文化や商品を紹介するこのチャンネルの登録者数は約190万人にも上り、日本在住の全てのユーチューバーの中で20位、日本で発信しているブラジル関連のユーチューバーでは1位と人気を博しています。

発信しているのは、ともに日系3世の栗山プリシラ（プリッチ）、ローマン・タレス・ジョナタン（ローガン）夫妻。「日本の魅力は、なかなか言葉では伝わりにくい。映像で発信してみよう！」という思いから、2013年にこのチャンネルを立ち上げたのだそう。現在、週3回、日本にまつわるさまざまなトピックを取り上げた番組をアップロードしています。

ポリシーは、スラングや過激な発言、危険な実験などを極力使用しないこと。センセーショナルに訴えかけることで視聴者数を伸ばすユーチューバーが多いなか、地道なスタンスで内容の充実したコンテンツを毎回きちんと制作、着実にファンを増やしているのは、とても珍しいケースです。

日本のポジティブな面を発信してブラジル人に影響を与えるのが、このチャンネルの狙い。30万～100万人程度と、案件によって視聴数は異なりますが、反応が少ない投稿も、しっかりと作りこんだものばかり。「そうした番組も見てくれる人たちこそ固定ファンだと思い、番組を育てていくことが重要」と、ローガン夫妻は話しています。

中南米の日系社会と連携を強化するために

「中南米社会との連携に関する有識者懇談会」を開催

Interview | 堀坂浩太郎 上智大学名誉教授

2017年、岸田文雄外務大臣（当時）の下、「中南米日系社会との連携に関する有識者懇談会」が立ち上げられ、4回にわたる会合が開かれました。この懇談会には、自治体、経済界、学界、関連団体など各界を代表する有識者が出席。闊達に行なわれた議論を元に、目下、オールジャパンで日系社会との連携を深める取り組みが行なわれています。懇談会の座長を務めた堀坂教授に、その背景をお聞きしました。

――ひとくちに「中南米の日系人」といっても、エリアは広域です。国によって違いがあるのではないでしょうか？

国や地域によって、日系社会の成り立ちや規模、世代状況などの背景が異なります。連携するうえでは、それぞれの実情にあった取り組みが必要でしょう。

――日本ではなかなかイメージしがたい「中南米の日系社会」。現地では、どのように受け止められていますか？

中南米は、かつての宗主国（スペインやポルトガルなど）からの入植者や、植民地時代にアフリカから奴隷として連れてこられた黒人、世界各地からの移住者など、多様なルーツを持つ人たちが暮らす地域です。日系人は、そうした多人種・多民族・多文化国家の一翼を担う重要な存在となっています。また、彼らの職業はバラエティに富んでいて、それぞれの分野で名を馳せている人も少なくありません。数の上ではマイノリティですが、存在感や影響力は大いにあるといっていいでしょう。

――中南米の日系社会は、それぞれの国を構成する大切な一部であるということですね。でも、だからといってなぜ、日本が、遠く離れた中南米の日系社会と連携する必要があるのですか？

今、世界のグローバル化・一体化が進むと同時に、個々の国が自己主張を強めています。そうしたなかで、日本に関心を持ち、理解してくれる人たちを増やすことは、とても重要なことではないでしょうか。中南米で約210万人も存在する日系人はまさに、そのための重要なチャネルなのです。さらに彼らは、国境を越え、ほかの国の日系人同士とのつながりを作る可能性も秘めています。二国間だけでなく「多国間も含めた架け橋」となる彼らは、日本にとって頼もしいパートナーなのです。

――なぜ今、なのでしょう？

戦後移住の時代からすでに半世紀が経ち、日系人は現地社会にほぼ完全に溶け込んでいます。世代交代が進むにつれて、当然のことながら「日系」意識が希薄な人たちも増えています。でも、だからといって、彼らは日本に関心がないわけではないんです。ポップカルチャーやクールジャパンなどのブームや、ふとしたことをきっかけに、自分のルーツに関心を持つ人も出てきています。また、自身は日系人でなくても、日系人と結婚したり、日系団体の活動に参加したり、日本に関心を持って日本語を学ぶ非日系の人も多くなりました。こうした人たちを含めれば、日系社会は拡大・発展しています。そんな今だからこそ、中南米日系社会と日本が連携する絶好のチャンスだと言えるのです。

――連携で大切なことは、どんなことですか？

日本に対する彼らの期待に応えると同時に、彼らの関心に働きかけて、「日本の今」を発信することでしょうね。もちろん、一方的に発信するのではなく、各国の日系社会で行われている事業や行事、ネットワークをきちんと把握し、コラボすることも大切です。

――日本在住の日系人の方々に対しては、どんな取り組みが必要ですか？

「在日日系人は多様な文化的背景を持った人たちである」ということを認識して、彼らのパワーを日本のグローバル化に生かしていく姿勢が必要です。取り組みとしては、いわゆる1990年代の「デカセギ現象」と言われた時代が終わり、多くの日系人が日本に定着するなか、親とともに来日した子どもたちの教育支援や就職支援、なかでも高い専門性を持った人材としての登用がより重要になってきています。

政府・オールジャパンで進められている取り組み

中南米の日系社会は、日本と中南米各国をつなぐ架け橋として、長年にわたってその関係強化に貢献してきました。近年、その中南米日系社会も、世代交代や現地社会との融合が進み、さまざまなジャンルで影響力を持つ日系人が活躍したり、国境を越えるネットワークが構築されたりするなど、新しい時代を迎えています。こうした背景を踏まえて、政府・政府関係機関、地方自治体、地方公共団体、経済界、学会などオールジャパンで取り組んでいるのが、中南米日系社会との連携強化。その取り組みの一部をご紹介しましょう。

JICA

移住者子弟の人材育成

次世代を担う人材を育成するために、移住者の子弟を日本に招へい。学校への体験入学やホームステイなどを通して、日本の文化・社会への理解を深め、日系人としてのアイデンティティを向上させるプログラムを実施しています。

日系社会次世代育成研修により招へいされた中学生

外務省

次世代日系社会リーダーの招へい

各国・地域で活躍し、長期にわたりリーダーシップを発揮することが期待される「次世代日系人指導者」を日本に招へい。有識者との意見交換や日本の伝統文化体験、地方訪問などを通じて、日本の理解を促進し、関係者間のネットワークを構築してもらうことを目的としています。

次世代日系人指導者会議の様子

農林水産省

サンパウロ日本祭りにおける日本食・食文化の発信

会場で注目を集めた日本食セミナー

サンパウロで開催された2017年の日本祭りで、日本食・食文化の魅力を知っていただくための食セミナーと日本産品を使用した料理の試食を行ないました。

民間企業

子どもたちの復帰を支援するカエルプロジェクト

日本で育った子どもたちが親とともにブラジルへ帰国した後の、学校・社会への復帰・順応を支援しているのが「カエルプロジェクト」。民間企業の支援を得て発足しました。心理士やカウンセラー、医師、教師などのサポートチームをサンパウロに派遣し、問題を抱える子どもたちを心理面、学習面、環境面でケアしています。

日本からブラジルに戻った子どもたちが集う「カエルプロジェクト」（写真提供元：Projeto Kaeru）

ここに行けばもっと日系社会のことがわかります

日本や中南米各国には、日系社会のことを詳しく紹介している施設や美しい日本庭園があります。日本人が海外に移住した経緯や歴史、現代の日系人のライフスタイルなど、さまざまなことを学べる施設は、日系人と日本人をつなぐ大切な場所。市民の憩いの場や観光スポットになっているところもあります。

日本

JICA 横浜海外移住資料館
Japanese Overseas Migration Museum

100年以上の日本人移住の歴史とともに、その社会や移住先での活躍、日本とのつながりについて紹介。常設展示やテーマを絞った企画展示のほか、移住や日系人社会に関連した講演会やイベントも開催しています。

〒231-0001　神奈川県横浜市中区新港 2-3-1
https://www.jica.go.jp/jomm/

海外移住と文化の交流センター
Kobe Center for Overseas Migration and Cultural Interaction

海外移住の歴史や当時の街並みを写真や映像で紹介。移住先で使用されていた農具など、貴重な資料も展示しています。館内には、国際芸術交流のアトリエ、在住外国人支援を目的とした情報資料室もあり活用されています。

〒650-0003　兵庫県神戸市中央区山本通 3 丁目 19-8
http://www.kobe-center.jp/

アルゼンチン

ブエノスアイレス日本庭園
Jardin Japones de Buenos Aires

池泉回遊式の日本庭園。当時の皇太子同妃両殿下のご訪問を記念して、1967年に造成されました(その後、1997年に天皇皇后両陛下としてふたたびご訪問されています)。日系団体を中心に維持管理されているこの庭園には、茶室や太鼓橋もあり、都心のオアシス的存在となっています。

Av. Casares 2966, 1425 CABA
http://www.jardinjapones.org.ar/

ブラジル

ブラジル日本文化福祉協会
Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa e de Assistência Social

1955年の設立以来、子弟教育なども含めた日系社会の生活を支えるブラジル日本文化福祉協会。その施設内には講堂や展示ホールがあり、多くのイベントが開催されています。「ブラジル日本移民史料館」もこの中にあるほか、日本館などの運営も行っています。

Rua São Joaquim, 381 - Liberdade　01508-900 - São Paulo
http://www.bunkyo.org.br

ペルー

日秘文化会館
Centro Cultural Peruano Japonés

館内には1025席の「日秘劇場」のほか、日系１世としてペルーで活躍した実業家の名を冠した「平岡千代照日本人ペルー移住史料館」もあります。ここでは、一世紀にわたる日本人移民の歴史を、日本語パネルや展示物を使って詳しく紹介。観光スポットのひとつにもなっています。

Centro Cultural Peruano Japonés
Av. Gregorio Escobedo 803, Residencial San Felipe, Jesús María,Lima 11
http://www.apj.org.pe/

メキシコ

日墨会館
Asociación México Japonesa

1959年に日本とメキシコ両国の文化交流の殿堂として建設。 広大な敷地内には、本館のほか、枯山水風の日本庭園、プール、テニスコートが設けられています。隣接する「あかね記念館」では、日本人メキシコ移住の歴史を詳しく紹介しています。

Fujiyama 144, Col.Las Águilas, C.P.01710, CDMX
http://amj.mx/

ボリビア

ボリビア日本人移住資料館
https://www.facebook.com/nikkailp/?rf=381554465213291

オキナワ移住地 オキナワ・ボリビア歴史資料館
Eメール　abjok@cotas.com.bo

サンフアン移住地移民史料館
Eメール
sanjuan@abj-sanjuan.org.bo ／ abjtv@abj-sanjuan.org.bo

パラグアイ

写真集「パラグアイの中の日本」
http://www.py.emb-japan.go.jp/itpr_ja/nikokukan-kankei.html

外務省　〒100-8919 東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1 TEL03-3580-3311（代）
編集：中南米局南米課　　発行：国内広報室

表紙の写真……Vibra Joven。メキシコおよび中南米の日系の若者が、合宿生活を通じて連帯を深め、自分たちと日系社会の将来について考え、次世代のリーダーを育成することを目的とし行っている事業です。

2018.3